

両ダングゴの浅ダナ釣り

最近の傾向

水温が上昇し、へら鮒の動きがすこぶる良くなる盛期の浅ダナの釣りは、水面直下から狙うタナまで広域に魚が寄り、アタリも複雑化する。しかし魚をコントロールしながら釣り込めれば、数釣りが可能となり、ウキの動きをある程度抑えて釣っていくと、型も揃えられる。両ダングゴの浅ダナ釣りが最も面白くなるのが、夏場といえるだろう。

ダングゴの基本は、一気に拡散してバラけるものより、狙うタナ付近で徐々にバラけ、なおかつ芯残りするもの。今年の傾向はしつとりネバで、ウキにしつかりなじみ幅の出るものがベスト。後の調整がしやすいものがいい。

タナ規定がなければ、20〜30cmのカツツケ。1m規定なら1m以上に取り、ウキをなじませ気味に釣っていくと、好時合につながる。また、エサで注意したいの

両ダングゴの浅ダナ釣りの基本タックル

竿 8~12尺
(細仕掛けで大型を狙うときは、胴に乗るやわらかめがいい)

ウキ
浅ダナタイプで浮力があるもの

ミチイト 0.6~1号

板オモリ 1点止め

ハリス 0.3~0.5号
上20cm、下27cmからスタートし、徐々につめていく

ハリ 4~5号

エサ
実寸大

エサの大きさ
直径1.2~1.3cm

オモリ
実寸大

オモリのサイズ
0.25mm厚で1.3cm前後

は、へら鮒のあおりによるエサ抜けだ。ネバリや硬さに注意して、エサをきちんと持たせることが必要になる。



バランスの取れたしっかりハリ持ちするタイプ

① 基本パターン

バラケマツハ400cc +
 パウダーベイトヘラ200cc +
 浅ダナー本200cc +
 ダンゴの底釣り夏100cc + 水200cc



すべてのエサを粉のうちに混ぜ、水を加えて仕上げる。完全に水を吸うと、硬めのエサになる。小分けして手水を打ちながら使っていく。

ウキがなじまない!

③ 練り込み加減で対応

A

基本パターンのエサでウキがなじまないときは、いったん手水を打ってやわらかくしてから、一部を上から押す「押し練り」、次に一部を握るように練る「握り練り」、さらにパウルのふちに擦るような「擦り練り」という段階で、エサを持たせるようにしよう。擦り練りは、エサに一番強いネバりとコシが出るので、一度に10回ぐらいずつ様子を見ながら加えていくとよい。

B

練り込みで対応できないときは、「パウダーベイトヘラ」を「特S」に置き換えたブレンドで作り返すといだろう。加えて、エサを修正したり作り直したりするほかに、ハリをワンサイズ大きくすると、エサ持ちがよくなる。

バラケマツハ400cc + 特S200cc +
 浅ダナー本200cc +
 ダンゴの底釣り夏100cc +
 水200cc



もっと魚を寄せたい!

② エサのふくらみとバラケ性を促進

A

基本エサに手水を打ち、やわらかくすることでエサのふくらみとバラケ性は増す。さらにエサをバラケさせ、魚を寄せたいときは、エサの上から「スーパーダンゴ」をバラバラと振りかけて使ってみよう。「スーパーダンゴ」が水中でのバラケ性を促進させ、寄せの効果が高まる。



B

基本パターンより「ダンゴの底釣り夏」を少なめにすると、エサは開きやすくなる。さらにエサ付けのとき、若干角張らせるようにすると、落下中のバラケ性も強まり、寄せ効果が高まる。

バラケマツハ400cc + パウダーベイトヘラ200cc
 + 浅ダナー本200cc + ダンゴの底釣り夏70cc
 + 水200cc



軽いエサが良いときのベストブレンド

④「特S」&「GTS」を使った通称「2S」パターン

特S200cc + GTS200cc + 水100cc + 特S100cc



+



+



+



「特S」200cc + 「GTS」200ccを水100ccでヤワ状にし、5分以上置いてから最後に「特S」100ccで仕上げる。軽くてネバリがあり、軽いダンゴに反応するときのベストブレンドだ。バラケを強くしたいときは、最後の仕上げを「GTS」にする。

その場合、エサ抜けがよくなるので、若干の練り込みを加えたい。ただし、練り込んだエサで反応が悪い場合は、一部を小分けし、「ダンゴの底釣り夏」を振りかけて軽く練ると、練り込まなくてもまとまり、重みの加わった持ちのよいエサができる。

浅ダナ両ダンゴ / こんなときどおする

カラツンが激しいとき



カラツンは、エサの持ち過ぎや大き過ぎが原因になりやすい。エサが持てなければ、前述のようにサワリだけで決めアタリが出なくなり、その微妙な接点を探るのが両ダンゴの釣りでもある。

基本的には持つエサでカラツンを出してから、徐々にエサを変化させ、ネバリや大きさを探っていくとよい。やわらかいエサにへら鮒が反応するが、やわらかいエサが持たない。そんなときは「粘力」を利用してみよう。

また、エサの表面を指で転がすだけでも、途中のバラケは抑えられ、エサ持ちがよくなるし、ハリ付け時の圧の加え方でも持ち方を微妙に変えることができる。



サワリだけでアタリが出ないとき

サワリだけで決めアタリが出ない。その最大の原因はエサが持っていないこと。モヤモヤしているうちにハリ抜けしていることが、盛期には多い。の項を参考に、ウキにしっかりなじみ幅を出すようにしたい。狙っているタナにへら鮒が寄らなければ、強いアタリは出ず、釣ることもできない。ウキの浮力が弱すぎると、ウキが立ち上がるまでにエサは水中でもまれてバラけてしまい、最後の決めアタリにまで至らなくなる。ウキの浮力にも注意しよう。

サワリがあるのだから、へら鮒は寄っている証拠。あとはエサを確実に持たせる方向で、釣りを組み立てていけば、改善されていくだろう。



短竿でもペレットエサは効果的

⑤ ペレット系パターン

ペレ道100cc + バラケマツハ100cc +
白べら100cc + 水100cc + 軽駄適量



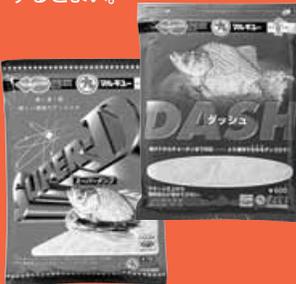
長竿でタナ2本前後の「ペレ宙」とは異なり、短竿の浅タナでペレットを使うときは、集魚材なしの白いエサだけでなく、「バラケマツハ」などのさなぎ粉入りのエサも組み合わせたほうがよい。

狙うタナへへら鮎を誘い込む軽駄エサの開きと寄ったへらを留めるペレットの組み合わせとイメージしよう。作り方のコツは、水でドロドロ状にしたところへ「軽駄」を足し、使いやすい硬さに調整する。

ペレット系パターン / こんなときどおする

カラツンが激しいとき

エサが硬い、ネバリ過ぎのときにカラツンが発生する。そのような場合は、基エサの一部に手水を打ち、開く特性のエサを振りかけ、練りすぎたエサを復活させるようにする。「スーパーダango」が使いやすいが、「ダッシュ」なども効果がある。また、ギリギリまで軟らかいタッチで探ることも有効で、その際にはハリをワンサイズ大きくするとよい。



ウワズリ傾向のとき

最後の調整用エサの「軽駄」を「浅ダナー一本」または「バラケバインダー」に替えるとエサ持ちとネバリが俄然強くなり、タナが作れるようになる。また、別な方法としては「粘力」をスプーン1杯入れるだけでもネバリは強くなりウワズリを抑えられる。エサを練り込む方法で対応できないときにはブレンドで調整しよう。



アタリが少ないとき

魚の寄りが少ないと判断できるので、エサを開かせる方向で「スーパーダango」、「新B」などをベースに使用するが、もしくは「セット専用バラケ」をブレンドすることで寄せの効果は倍増する。エサ付けも工夫し、若干ラフにハリ付けすることで水中での落下時に興味を示させることができる。

